

22. 老人性難聴者の語音の聴取に関する研究

○深沢 治¹⁾ 進藤美津子²⁾ 荒井隆行²⁾ 加我君孝³⁾

¹⁾上智大学言語障害研究コース ²⁾上智大学

³⁾東京大学

高音漸傾型の聴力を示す老人性難聴者の語音聴取では、高音域と中音域の聴力のアンバランス（以下、聴力差と記す）によって音声が歪み、さらに加齢による感覚器官の機能低下により、語の聴取と認知が追いつかない、といわれる。本研究では、話速やノイズの有無の違った条件下での老人性難聴者の語音聴取能力を分析し、上記の特徴の検証を試みた。

検査法は、有意味語とその子音のみを変えた無意味語の、緩速・普通速/ノイズ有・無の計4条件での聴取・書取りで、語音聴取能力を①音素単位での聴取成績、②無意味語から有意味語への異聴件数、③単語レベルでの認知能力という3つの側面から測定した。

その結果：(1) 老人性難聴者は、話速やノイズの影響を受けやすい。(2) 聴力差と聴取成績・異聴件数の間には有意な相関関係はなく、むしろ平均聴力との間に有意な相関関係がある。(3) 老人性難聴者では無意味語の正答率が著しく低下するが、有意味語の正答率は高く、特に無ノイズ下なら100%に近い。

老人性難聴者が話速とノイズの影響を受けやすいのは、加齢による感覚器官の機能低下や脳の認知機能の緩慢化、さらに選択的注意力の低下のためと考えられる。一方当初予測していた、聴力差の語音聴取への影響は見出せず、むしろ平均聴力の影響が明白であった。（音量は各被検者の最適聴取レベルに合わせた。）その理由として、老人性難聴者には健聴者と違った正規化やトップダウン処理が働く、ということが考えられる。一方有意味語の単語レベルでの認知能力が高いのは、言語の使用歴が長く、聞き慣れた語であればより強いトップダウン処理で、認知できるためと考えられる。

以上の点をふまえると、よく行われるように、①話速を抑え（ただし記憶保持力にも配慮して適時ポーズを入れる）、②雑音を極力排除し、③大きめの声で話せば、難聴高齢者との会話は改善されると考えられる。また、補聴器の効果も期待できる。